

## 「個性性」の要求

— 現代社会と人間との関係構築に向けて —

北 野 菜 穂\*

N. ルーマンのシステム理論を基礎とした現代社会理論は、人間またはその行為はもはや社会構造の要素ではない、と位置づけたことから、社会の非人間化をより増幅させる、または社会機能における人間の地位を低下させる理論として批判された。しかし、「近代（以降の社会）」の一般理論の構築を目指すN. ルーマンが社会システム理論をもって特に企図しているのは、旧ヨーロッパ的な人間主義を現代社会の診断理論として用いることへの批判である。非常に粗雑な言い方ではあるが、旧ヨーロッパ的な人間主義とは、N. ルーマンにとって人間の主体性や理性によって社会を把握しようとする試みであり、あらゆる社会的機能の根源を、『「個」的要素である人間』へと還元しようとする試みであった。N. ルーマンはこうした「個人」概念にもとづく社会理論の構想を批判するのであり、それはJ. ハーバーマスの論争にしても然り、と筆者は考えている。

まず本稿では、N. ルーマンが批判する、彼の理解のうえでの旧ヨーロッパ的な人間主義とは何かを考察する。N. ルーマンの理解のうえでの、ということはすでに彼の批判的なまなざしを内包した回答となる。彼は、「人間」の持

つゼマンティークが、時代とともに変化してきたという点を強調する。そしてこのことは現代社会の進化、すなわち社会の機能分化論と論理的関係を持ち、進化した社会において依然旧来の説得力を失ったゼマンティークを用いることを、批判するのである。この「進化した社会」とは、「機能分化の進んだ社会」であり、旧ヨーロッパ的な人間主義を思想背景とした社会理論では機能分化社会を記述しえない、というのがN. ルーマンの見解である。では、N. ルーマンにとって、このような現代社会における「人間」とはどのような存在なのか。それは、社会の要素としての「個人」ではない。N. ルーマンは、人間は社会というシステムの環境の一部であると位置づけるのである。システム環境、すなわち、システム（社会）の外部に位置する人間が、システムと「どのような」関係性を築くのか。筆者がN. ルーマンの理論に特に注目するのは、まさにこの問いである。システム理論の解説から見ると、関係性の構築はオートポイエーシスのシステムとしての、社会（＝コミュニケーション）システムと心的（＝意識）システムが「相互浸透」することで行われる。本稿では、「いかに」という理論的方法を検証する

\*早稲田大学大学院社会科学研究科 博士後期課程4年（指導教員 古賀勝次郎）

ものではないため、相互浸透の理論は、本稿では深く言及しない。しかし、人間はシステム社会の外部（環境）に位置する、そして、機能分化した現代社会システムでは、システム環境である人間は、社会システムと相互浸透を通して関係性を築いている、という理論から、N. ルーマンは、社会と人間の「どのような」関係性を導き出そうとしていたのかを検証する。

社会システムの内部ではなく外側に押し遣られてしまった個々の人間と、社会との関係性の鍵となるのが、「個性性の要求」である。そこで、「個性性」の概念を確認する。システム化した現代社会における人間には、身体的または感性的な不可侵な「個 (unique)」性だけではなく、システムと関係性を築く際の機能的な差異を示すことで明らかになる「個」性という概念も付随している。N. ルーマンは、人間主義に見られる「個人」概念では、社会構成の要件としてはありようもないとし、「個々」の意識やコミュニケーションこそが、システムを構成する要素である、とする。換言すれば、意識やコミュニケーションが近代社会の社会システムや心的システムを構成する「個」的要素である、と描写されれば、「近代」を描きうる理論が構築できるであろう、とN. ルーマンは考えていたと言えよう。

こうした差異を指し示すことで生じる「個性性」概念で、社会と係わる人間を捉える方が、現代社会と人間との関係構築の可能性に多大な示唆を与える、というのが本稿の主張である。現代社会を捉える理論構築の基礎に人間主義をおくことに警鐘を鳴らし、人間を社会システムから環境へと排除し、新たな「個性性」概念を通して、N. ルーマン理論は、現代社会と人間

との関係性構築により自由度を与えることができるのである。

## 1. 旧ヨーロッパ的な人間主義

N. ルーマンは、旧ヨーロッパの伝統的な人間主義（ヒューマニズム）では、近現代社会における「人間」の問題を十分に捉えることができないとする。「統一体としての人間存在の自立性」というような概念で記述する特定の伝統的手法は、もはや今日の学問的發展に適さない」と述べ [Luhmann 1990=1996: 12]、このような人間主義を超克することが必要不可欠であるという論陣を張るのである。ここではまず、N. ルーマンによる「旧ヨーロッパ的な人間主義」とはどのようなものであるかを考察する。

旧ヨーロッパの伝統的な思考は、人間を分割不可能で不可侵な「個」の人間、すなわち「個人」として観察する基盤を与えるものである。それは、社会やまたは世界を現実化する基礎であり主体は「我」であった。人間の本性に根拠を置いて社会秩序を説明しようとするのである。N. ルーマンによれば、こうしたヨーロッパの思想伝統は、たったひとつの思考を持ち続けている。社会はしかるべき資格を持った市民からなる政治的社会である、という思考である。これはプラトンとアリストテレスによる政治的共同体の構想からずっと続いてきたものである。アリストテレスは、人間をゾーン・ポリティコン（政治的動物）としての規定しており、そうした人間が形成する社会は必然的に政治的社会となるのである。ここでは、人間はすでに条件付きで描かれている。すなわち、社会を形成する人間は「政治的」なのである。人間とし

ての条件が社会秩序の条件となる、という思考がここにはある。この人間の存在条件という観点、次なる「諸個人が社会の部分であり、社会は諸個人からなる」という社会理論に採用されていることにより、その基本要素である人間の性質が問われてくるのである<sup>(1)</sup>。すなわち「人間の本性」や「理性論」が登場してくる土台となっていたのである。

「個人」という思考は、古代ギリシアの「ゾン・ポリティコン（政治的動物）」が「社会的動物」を生んだことによるものである。N. ルーマンによると、人間の本性（人間の成長能力、人間らしい形式を実現する能力）は、「社会的秩序の基準的な必要諸条件によって規定されるもの（傍点は原文のまま）」と考えられており、「人間の本性は人間の徳性であり、社会的生活において尊重を獲得したり喪失したりする人間の能力（傍点は原文のまま）」であり、「そうした社会秩序のゼマンティックは、厳密な意味で「自然法的」であるにちがいがなかった」のである [Luhmann 1984=1993: 332]。こうした人間のゼマンティックで捉えられる現実の人間のあり方は、「本性的存在」と捉えられた。このような思考の帰結として、N. ルーマンは、社会とは

「そうした人間たちが都市において発展させた共同生活として、つまり、人間の身体の諸器官のように強固に結び合っていないが人びとの身体から成り立つ独自の種類の身体として、さらにその延長線上において人間の総体つまり人類」 [Luhmann 1984=1993: 333]

というように理解するに至った。

しかし、こうした思考を再定義しようとする一歩が自然法に基づいた契約学説にみられる、

とN. ルーマンは考える。つまり、勝手に変更はできないものであるが、自由に結ばれる契約である、と社会をみる考え方である。このような、社会構造が変動していた過渡期に現れた社会契約理論は、まさにその社会構造が発展する、という前提があってこそ登場したものである、とN. ルーマンは見る。さらにその後の政治革命や産業革命、または人間を対象とした自然科学の発展、多様化によって、

「生物学、心理学、および社会学がお互いに分離し、そうした諸科学のそれぞれは、法の規範的調整、宗教の表象、あるいは政治上の価値や目標に対して距離をとることができるようになった」 [Luhmann 1984=1993: 333-334]

のである。

その後、19世紀に入ってもさらに新しい人間観を模索する姿勢が続く。いうまでもなく、社会学がそれであり、創成期以来、人間と社会の関係性をテーマとして取り扱う学問である。自らを社会学者と位置づけたN. ルーマンによれば、古典的社会学の理論形成を刺激したのは、19世紀の「個人主義 対 社会主義（あるいは集合主義）」というイデオロギーの対立であった。しかし、どちらのアプローチにせよその根底にある人間観は、人間とは他の多くの人間との共通性を持ち、協力して連帯するものでありながら、同時にまた個別的なものであり、社会を変化させうる要素（刺激）でありうる、というようなものであろう。「個人が社会をつくる」から、「個人が社会をつくり、社会が個人をつくる」という対立構造へ変化を遂げても、個人という思考は統一体としての「人間性」の探求という枠組みを免れるものではなかったのである。このような人間と社会の関係についての把

握は、人間の側としては「主体性」「主意性」などに力点を置く理論が、社会の側としては、「社会の維持・発展に貢献する個人」という理論の二者択一的な構図を持つようになったと見られる。こうすると、社会との関係における人間の記述は、その理論構成に応じて、「個別的な存在」または「共通性と一般性を持つ存在」というように使い分けられるようになる。個別的で具体的な欲求を持った主体的な「個人」と、社会の秩序の構成要素として社会秩序維持・発展への貢献を求められる「個人」である。

このような近代初期の人間観の変化は、社会の分化という理論と深く関わっている。社会が分化をとげ、複雑化したさいに、その営みがすべて統一体としての人間の主体性になかったものであるうる訳がない。それでもあえて“個別的で具体的な欲求や要求を持った主体的な「個人」”を基準にして社会の働きを語ろうとすると、そこには対立概念しか生じてこない。人間の本性には還元し得ないようなことが社会の現象として見られるようになってくるからである。そして、社会のあり方と人間のあり方が対立の構図をもつことで、「社会に対する否定性をもつ人間」という可能性を開いてしまうのである。例えば、分化社会の一つである経済が人間を搾取し、疎外する略奪的なものとして把握されるようになり、政治は支配として考えられるようになるのである。すなわち、機能分化を遂げた社会を、旧来の人間主義的視野で語ろうとすると、社会の働きをただ否定し続けるだけの意味しか持たない「人間」へと人間自ら追いやってしまうのである。旧ヨーロッパの人間主義は、「本性」という地位から追いやられてしまっている。このようなゼマンティー

クはすでに説得力を持たない、とN. ルーマンは主張するのである。

## 2. 社会の進化

N. ルーマンの社会システム理論における「人間」概念の位置づけや、また、彼の構想する社会の基本要素である「個体 (=コミュニケーションや意識)」と人間関係を明らかにし、伝統的な人間主義に対してN. ルーマンがどのような批判を試みているのかを解明ことは、現代社会を診断する方法論を与えてくれるというだけでなく、人間は現代社会とどのような関係性を築くべきか、という、ある意味倫理的理論へのアプローチにも示唆を与えるものだと思筆者は考える。上述したように、N. ルーマンの社会理論における「人間」は、旧来の西欧思想に基づいた「人間」概念を現代社会に応用することに対する批判である。N. ルーマンが、コミュニケーション・システム社会という視野から人間を捉えなおそうとするのは、近現代の機能分化した社会において、こうした西欧思想の伝統的人間概念はすでに説得力を持たないものと考えからである。そのような契機がおこったのは、なぜならば、トートロジー的にきこえるかもしれないが、社会が機能分化をとげたからである。ここで念頭においておかななくてはならないことは、社会の機能分化は突然発生したものではない、ということである。それは次第に明らかになり始めた「進化」であった。N. ルーマンの念頭にあるのは、ヨーロッパであり、進化の線を引いているのは17世紀以降のヨーロッパである<sup>(2)</sup>。

N. ルーマンの意味する社会の進化とは、目標を目指す過程という意味の進化ではなく、自

己準拠システムである社会が諸可能性の地平で環境と自己の差異を選択する過程で生ずる構造変化のことである。したがって、私たちは、社会の進化について語っている、という言及はできない。社会の進化のなかで語っているのである。これは過去また未来についての言述についても妥当するものである。

N. ルーマンは、こうした進化の概念のうえで、機能分化する以前の社会は「成層化した社会」すなわち「身分的に分化していた社会」であったと述べる [Luhmann 1984=1993: 485]。

このような社会において個人としての人間は、社会の中にある一つの身分がその人の条件として考えられていた。個々人は、いかなる地位や身分に属しているのかということによって規定され、それは個人の人格性のもっとも安定的な特性をなしていると考えられていた。17世紀後半以降から18世紀になると、西欧社会はその構造の変化期に入り、「世界全体または人類全体と人々」という差異で捉えられていた図式では、社会秩序を捉えることができなくなる。そうではなく、世界全体または人類全体は人間の対にあるのではなく、人間のなかに既に存在しているものとして、(統一的な全体としてではなく) 一般的なものとして人間の中で現存しているものとして理解されるようになった。そして、世界全体または人間社会の秩序はいかにして可能なのか、という問いがなされるようになったのである。N. ルーマンのこうした近代化に関する論述にはルソーがその契機として引き合いに出される [河上 1991: 38]。

ルソーらによる社会契約論の人間観、または社会と人間のつながりについての視角とは、いたるところで鎖につながれているが、人間は自

由なものとして生まれた、という、人間を「全体」に対する束縛を持たない自由な(個別的な)ものとして位置づけるものであった。そして社会における人々のつながりを一般的な(なんら特殊なものではない)ものとして、捉えようとした。自然法概念においても、自然という規範で束縛されたのではない、または単なる全体に対する要素としてでもない、新しい人間概念を追求する基礎としての位置づけを与えるものであった。それは、秩序ある社会を作り出す人々のつながりを、最初から秩序ある世界(全体)のために(特殊な目的をもったものとして)あるのではなく、規範的な範疇から抜け出した単なる事実として、一般的なものとして捉えようとする試みへ、方向付けた。事実の認識と規範とが区別されるようになり、また最も重要なものは事実であっても規範ではないと考えられるようになってきたのである。こうして、それまで「事実の規範」として君臨していた自然概念は、「人間の自然」「人間の本性」とまで縮減された。このような近代以降の人間概念や自然概念はさらに縮減され、人間の本性は基本的に「理性」だ、ということまで縮減されたのである。

N. ルーマンは、これが18世紀後半からカントまで続いたプロセスであった、と理解している。こうした思想の変移の背景には、17世紀後半から18世紀に至る間の西欧社会の変遷(宗教改革、自然科学の発展、政治革命、産業革命など)がある。これらの出来事が、例えばキリスト教会の権威を著しく低下させるという結果をもたらし、更には政治についての新しいゼマンティークをもたらした。すなわち、政治と宗教が分離したことで、政治は独自のほたらき領

域をもつようになったのである。こうした変化は、しかしながら外界からの強制として生じたのではなく、自分自身でその境界を指し示すような装置を整備するようになることで、なかから生じてきたものであった。こうした発展は、政治が他者準拠から自己準拠へと転換したともいえよう。このような変化は、政治だけでなく、宗教、経済、家庭、教育といった全社会的ことがらに生じた。こうしたことがらにおける、ゼマンティークの変化（すなわち複雑性の増大）が、「十七世紀～十八世紀に次第に明らかになってきた」とN. ルーマンは言う〔河上 1991: 106-107〕。

こうして機能的に分化を始めた近代以降の社会では、「世界編成の主体としての個人」はもはや絶対命題ではなく、いかにしてそうあるか、という問いへと変化した、と言えるであろう。近現代社会は、様々に異なる機能領域へと分化した、「機能分化社会」である。例えば、政治、行政、経済、宗教、教育、家族、芸術などがあげられよう。その場合の諸機能は互いに代替不可能であり、ある機能領域が他の機能領域に包摂されるようなことはない。この社会は「歴史的に見るならばまさに一回的」で、「ある意味でこれまででなかった初めての形態」であり、さらに「この近代社会は頂点というものがないし、中心というものがなくてむしろ水平的で、分化している社会」と、N. ルーマンは定義する〔河上 1991: 106-107〕。したがって、「世界全体または人類全体と人々」という図式では、もはや社会秩序を捉えることができないのである。

こうした社会を、システム理論を基礎に捉えることは、継続に動的に自己構成をおこなって

いる社会システムが、可能性の普遍的な地平である世界の中にあって、システム／環境の差異を通じて複雑性の縮減を行い、不確定的な（すなわち他でもありえた、他の可能性との比較可能な）問題解決を行うものとして、分析する、という手がかりを与える。例えば、古代の宗教的な国家の概念が扱っていた統治の問題が、宗教システムと政治システムとが分化することを通じて、政治システムにとっての固有の問題として代替されることを機能分化といい、分化した政治システムは、自らのシステムの作動を通じて他のシステムとの境界を設けるのである。機能分化社会という枠組みで捉える分化とは、機能分析によって、すなわちオルタナティブなものを指し示すという意味を含意する機能によって捉える分化と還元できる。これは、常にオルタナティブな可能性を求めて変化する、瞬間的なものである。すなわち社会の進化とは、自己準拠システムである社会が諸可能性の地平で環境と自己の差異を選択する過程で生ずる構造変化のことなのである。

### 3. 「個性性 (Individualität)」の要求

現代社会における「個性性」は、こうした社会システム理論構想の枠内で捉える必要がある。社会システムは、心理システムからもまた生身の人間からも成り立っているものではない。しかし、社会システムの形成・維持・発展には、心理システムという外的環境が必要条件なのである。再度強調しておくが、心理システムは社会システムに重要ということではあっても、社会システムが自律的に社会システム自身のオペレーションに基づいて自らを形成していることを、心理システムはなんら妨げるもので

はない。その機能において、全く区別された別のシステムである。

そもそも、西欧思想にける「個性性」は、すでに自己準拠性をもっていた。すなわち「個体」である、ということは、その「個体」以外のすべてのことがらとは異なっていなければ、「個」体ではありえない、ということである。すなわち、個体とは、ユニークな属性 (Unique Owning) を持つからこそ、個体でありえた。したがって、個体がその個体以外のことがらとそれ自身を自ら区別する、と規定することもできる。そしてこの定義は、今でも応用可能である、と N. ルーマンは主張する [Luhmann 1984 = 1993: 485]。

18世紀以前の「個性性」とは、こうした「自らの規定」といった概念はもたず、分解が可能な全体に対する対立概念として捉えられていた。すなわち、分割不可能なことがらすべてが個体であり、したがって、社会における人間もまた、部分に分割できないものとして個性性をもつものの一つとして捉えられた。そもそも、人間の本質についての思想的根源は、古代ギリシアにおけるソクラテスの「魂の不滅」という表現に見られるように、肉体という存在から乖離した魂にある、という超越論であった。そして、この魂が、肉体的生に依存せず普遍的で分割不可能なもの、として理解されたがゆえに、個としての人間、すなわち「個人」が歴史的変化を受け付けられないものとして考えられたのである。中世のスコラ哲学においても、個人的存在性は外部から与えられるものではなく、「個人」概念は個人それ自身の個的存在性の源泉として考えられたのである。

しかし、18世紀にはいると、こうした個性性

概念に変化が生じる。超越論的主体の構成がカントによって意識哲学の中で明らかにされるのである。個人が主体に昇格され、個人の自己規定と自律が価値そのものである、とされたのである。人間は自らの欲求や利害や要求といったもので、自らの価値を規定しなくてはならなくなった。すなわち、個人的存在性もまた、自らが要求しなければ規定できず、人間は、在るだけでは「個人」たりえなくなったのである。さらに、機能分化が実現したことにより、自我と世界の境界、すなわち個人と社会の境界が明確に区別されるようになった。このことで、「私はだれなのか」という問いと、また他とは異なる個人であろうとする要求とが、アイデンティティーを規定する出発点とされるようになるのである。N. ルーマンは、カント哲学がその後の西欧思想家 (マルクスやヘーゲル) たちへ与えた寄与として、デカルトの、誰でも個体である (ergo, cogito sum) という出発点から人々はいかにして個体たりうるのかという問いへと立ち向かう方向性を示した、と指摘している [Luhmann 1984 = 1993: 487]。

存在→人間存在→ある階級の一員→国や町の住人→ある職業を持つ一員→家族の一員→その個人、という流れで捉えられていた人間の個人性は、社会の機能分化に伴って、そのゼマンティックを変容した [Luhmann 1982 = 1982: 181]。むしろ、個性性を持つという、まさにその事実が、最も一般的重要性を帯びるようになった。すなわち、何に対して個性的か、という、個性性の要求の準拠 (reference) によって定義されるものとして、ゼマンティックを変容させたのである。

「人間の個性性」の歴史的な問題に対して、



N. ルーマンは、こうした個性性そのものの自己準拠という考え方で捉えようと試みる。そして、「個体が自らを個体として描写するばあいには、個体というものは、自らの個性性を自己描写のための表現様式として用いていると言える」のであり、そうすることで「個体が自らを個体として再生産しているということであり、それにより個体が自らと環境との間をはっきりと境界づけている」と述べる [Luhmann 1984 = 1993: 499]。先ほど、「個性性」とは個体がその個体以外のことがらとそれ自身を自ら区別することであると述べた。自己準拠的システムをもつ世界で、この「個性性」にふさわしくあらうとするならば、自らが「個性性」を要求しなければならない。それは例として、

「個性性にふさわしくあらうとする個体は、そのオートポイエーシスの確認を、悪人のやり口、ノーマルなことにショックを与えること、前衛主義、革命、あらゆる体制化されたものや既成の自己様式化への容赦ない批判に求めている」 [Luhmann 1984 = 1993: 502]

ことが挙げられる。

個性性の「要求 (Anspruch)」とは、システム理論では、もともと環境から区別されているシステムが自らのシステム／環境という差異を自らの中に「再参入 (re-entry)」するさいのきっかけ要因である。近代にいたって、個人としての人間は、自らが何者であるのか、という定義を自らが行わなくてはならなくなった。人間は、社会システムの環境に位置しており、すなわち社会システムから排除された位置にいる。そうしたなかで、社会システムと相互浸透している人間の他のシステム、意識システムが、「個性性」の要求を掲げることで、個人としての

新たな自己を確認していくのである<sup>(3)</sup>。要するに、「個人」概念は、『「全体対部分」＝「社会対個人」』という図式で捉えられるために生じる概念ではなく、社会システムと心的システムの相互浸透から、「要求による個性性」という社会的ゼマンティックを生じさせるために定義される概念なのである。

このような、社会システム理論における個人概念は、人間の個性性の強化ともいえるであろう。それは、それぞれに専門化された機能に分化した下位システムをもつ現代社会では、人間は社会に包摂されるのではなく外部にあって自らの要求に応じて多様な下位システムに関係性を築くことになるからである。

#### 4. 現代社会における人間

現代社会の特性は様々に描写されてきている。本稿では、現代社会の特徴を機能分化と述べたが、これは、N. ルーマンの理論を基礎においたものであり、すなわち現代社会は、構造がまず有りきではなく、機能が機能することで社会構造が同時に作られる社会だ、という見解である。言葉が重複するが、機能が機能しなければ構造として在りえない諸社会が、機能しているのが、現代社会である。

こうした現代社会を、中世や封建社会と比べて、個々の人間が社会との親密な関係性を失いつつある、とする見方がある。確かに、人間の個人的な係りあいを要素として社会を作る場は限定されてきているだろう。たとえば現代社会の重要な下位システムである経済を見れば、個人が、物品を購入するという限定された活動より乖離したところで、経済システムが機能する。現在の経済システムは、物品交換や貨幣と



物品との交換、という原始的レベルからはるかに肥大化し、非人間的な関係性の上に成り立っている。非人間的な社会とは、非個人的な係り方が高度に機能化した社会と言える。相手を知っているかどうか、信頼できるかどうかが重要な鍵であった関係性から、相手を知っていても知らなくても関係を成り立たせることができる。警察官は、警察官という役割でもって（すなわち、その人間の個人的な特徴ではなくて）、相手と関係性を築くことができる。このような「個人」性が価値を持たない、非個人的な諸社会が現代社会を作っている。

しかし「システム化した現代社会とは非人間的な社会である」、という言述を、現代社会の構成及び機能に人間は不必要である、と理解するのは誤りである。前章で見てきたように、社会を構成する要素としての「個性」とは、要求により他と差異を指し示すことで得るものである。人間はもはや在るだけで必然的に社会と関係性を築く存在とは理解されず、要求することで、初めて関係性を構築できる。この要求を、人間の主体性という意味で捉えてはならない。個性の要求とは、人間の任意的行為という意味ではなく、個体が、個性であることを、差異を示すことでシステム存続のプロセスの一要因とすることである。こうした要求の方向性は、機能分化を遂げ多様な下位システムを持つ現代社会では、各システムにより異なる。したがって、人間は、社会システムの環境に位置し、その人の個人性を、（差異を示すことで）要求することで、社会との関係性を築くのである。

現代社会では、経済や行政などの非個人的関係性で機能する社会もあれば、より親密でパーソナルな関係性を要する社会もある。関係する

人間がどのような個性を要求し関係を築くかによって、非個人的であったり、個人的であったり、人間の親密度に高低が生じると言えるであろう。こうした視点から見ると、教育や家庭、芸術などは、より感性に基づき高度な親密性を帯びた「個」的関わり方を要求することで再生される社会システムである。このような社会では、個性の要求が増し、個としての人間のあり方が重要な鍵となる。その者の人間性、個人性が、信頼や愛情といった関係の要件を機能させるかどうかを決定する。

従って、このような「機能分化社会の環境に位置する人間」がいかに関能的に個性を要求するか、という問いを生じさせることは、人間の在り方や社会との関係性の築き方に、より自由な選択肢を持たせることになる。その結果、人間がいかに関現代社会とかかわるべきか、という倫理的アプローチにも、新たな視野を広げる示唆を与えるのである。

[投稿受理日2006.11.24/掲載決定日2006.11.30]

#### 注

- (1) N. ルーマンは、「人間が個人と呼ばれるばあいには、人間が社会にとってそれ以上分解しえない最終的要素であるがゆえに、そのように名付けられたのであり、そのさい、人間の魂と人間の身体とを分離したり、両者をそれぞれさらに分解したりすることは、念頭におかれてはいなかった。そうした分解がおこなわれれば、人間が社会の中に位置づけられるとする考え方や、人間が社会の要素であるとする考え方が打破されてしまったであろう」、と述べている [Luhmann 1984=1993: 332]。
- (2) このN. ルーマンの見解については、N. ルーマンの他の論文でも言及され、またN. ルーマンを迎えて日本で開かれた88年シンポジウムでも述べられている [河上 1991: 107]。
- (3) 重要な先行研究として、佐藤勉も、要求としての個性を、N. ルーマンの個人概念の特徴とし

て言及している [佐藤 1997: 418-422]。

#### 参考文献

- Luhmann, Niklas, 1982. *Liebe als Passion*. Suhrkamp. =  
Gaines, Jeremy, & Jones, Doris L., (tr) 1982. *Love as  
Passion*. Stanford Univ. Pr.
- Luhmann, Niklas, 1984. *Soziale Systeme: Grundriss einer  
allgemeinen Theorie*. Suhrkamp = 佐藤 勉 (監訳)  
1993, 『社会システム理論 上・下』, 恒星社厚生閣.
- Luhmann, Niklas, 1990. *Essays on Self-Reference*. Columbia  
Univ. Pr. = 土方 透, 大沢吉信 (訳) 1996, 『自己  
言及性について』, 国文社.
- 河上倫逸 (編) 1991, 『社会システム論と法の歴史と  
現在—ルーマン・シンポジウム』, 未来社.
- 佐藤 勉 (編) 1997, 『コミュニケーションと社会シ  
ステム —パーソンズ・ハーバーマス・ルーマン  
—』, 恒星社厚生閣.